

櫛押

〔類聚雜要抄〕四手宮一合略○中

櫛掃結所五朱、二正二升、

〔賤のをだ卷〕一昔は女の帽子と云ものをかぶりて歩行たり、略○中 扱其ぼうしをとむる針を銀にて物好に拵ひ、最負のかぶき役者の紋所などをうたせてさしたり、其後又櫛おさへ〇と云もの流行出たり、是は櫛の前へ倒れぬ様の爲なりとて、櫛の前へたてにさしこみたり、櫛おさへも銀にて、紋所或はさまざまの物好をうたせたり、

〔嬉遊笑覽容一下〕櫛押への出来しもその頃曆○寶なり、帽子針の頭を曲たるやうに作る、頭の丸き處に紋などほるなり、銀にて作る、明和二年前句附、廣いことかなく、當世は軒端にあまる櫛が出来、

櫛雜載

〔古事記上〕於是八百萬神共議而於速須佐之男命、負千位置戸、亦切鬚及手足爪令拔而、神夜良比夜良比岐、略○中 故所避追而降出雲國之肥上河上、在鳥髮地、略○中 以爲人有其河上而尋覓上往者老夫

與老女二人在而、童女置中而泣、略○中 故其老夫答言、僕者國神、大山上津見神之子焉、僕名謂足上名椎、妻名謂手上名椎、女名謂櫛名田比賣、亦問汝哭由者、何答自言、我之女者、自本在八稚女、是高志之八俣遠呂智、此三字以音略 每年來喫、略○中 爾速須佐之男命詔其老夫、是汝之女者、奉於吾哉、略○中 爾足名椎手名椎神自然坐者、恐立奉爾速須佐之男命、乃於湯津爪櫛取成其童女而、刺御美豆良、日本書紀、又見

〔今昔物語二十五〕源賴義朝臣討安陪貞任等語第十三

貞任ガ伯父安陪爲元、貞任ガ弟家任、降シテ出來ル、亦數日ヲ經テ、宗任等九人降シテ出來ル、其後國解ヲ奉テ頸ヲ斬レル者并ニ降ニ歸セル者、申シ上グ、次ノ年貞任、經濟重任ガ頸三ツ奉ル、京ニ入ル日、京中ノ上中下ノ人此レヲ見、噲ル事无限リ、首ヲ持上ル間、使近江國甲賀郡ニシテ、宮ヲ開テ首ヲ出シテ、其ノ髻ヲ合洗ム、宮ヲ持ル夫ハ貞任ガ從降人也、櫛无キ由ヲ云フ、使ノ云ク、汝等ガ